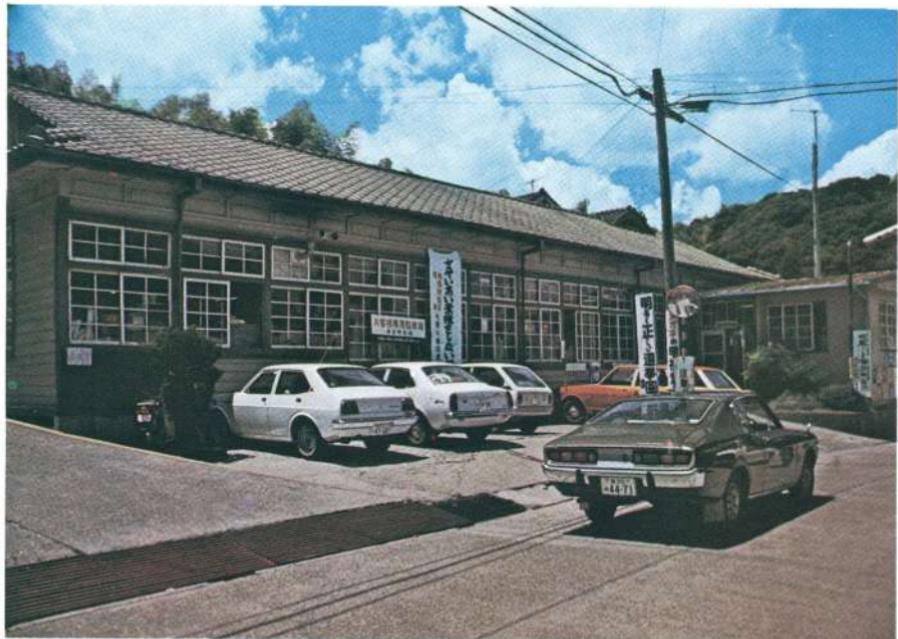




御
土
誌
溝
辺
町



高屋山上陵



町役場の全景



コミュニティセンター



鹿児島空港の全景

歴代村長・町長



第2、5、10代
川崎 矢太郎



第1、4代
岩元七郎



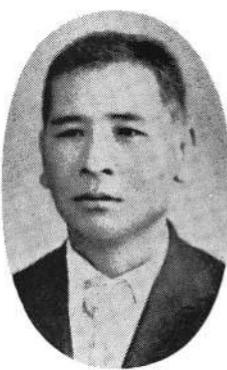
第6代
町田正八郎



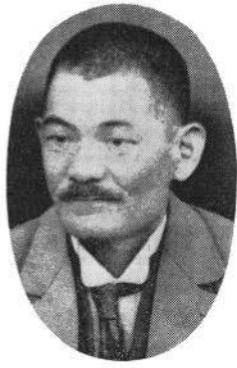
第3代
上原八二



第 8 代
上 原 四郎左衛門



第 7 代
郡 山 十大郎



第11、13代
野 間 豊 助



第 9 代
岩 下 平 八



第14、18、19代

重留重助



第12代

宗像林角



第17代

植木末五郎



第15、16代

久木田筑之助



第2、3代
野 村 秀 男



第20、21代
初代町長
岩 下 司 馬



第 4 代 (現)
有 馬 四 郎

歴代議長



第2代
竹下 一助



第1代
末永 完司



第5代
田上 静



第3、4代
町田 実利



第 7 代
最勝寺 良 直



第 6 代
山 崎 虎 熊



第 8、9 代 (現)
岩 元 保 雄

発刊のことば

美しい山河は常にその時代の先達の愛と汗と心によつて育てられ、つくられて來た。そうして生活と地域づくりが智恵と協力によつて培かれて來た。水を求め、地を拓き、しかもそれは小さな手の積み重ねであった。段溝を考えてみよう。木場水路、溜池をみてみよう。十三塚原の広大な開拓の苦労を想起してみよう。或は堅牢なあの石橋の原理を考えてみよう。そこに創造があり、工夫があった。又それを力づけたものに祖先を敬いお互に援けあう心があった。今もその史蹟が数多く残されている。周知のよう鹿児島藩は古来地方を郷に分け、郷はまた幾つかの村に分かれていた。郷は今の町の形態であり、村は今の大字にあたる。そこに名主、十触、水守、下見廻り等夫々に業務分担と責任体系が組まれていたときく。そうして門と与（組）の組織が今的小組合制度と性格上直接のつながりはないとしても何等かの共通点のある事はいなめない。又教育文化についても鹿児島は當時可成先進の地であったと記されている。そこに吾々は歴史の流れの尊さを感じる。温故知新（ふるきをたずね新しきを知る）。今現世はめまぐるしい変化を来しつつある。明治百年を迎えて隔世の感一しほである。この尊い歴史を回顧し改めて自分自身を見直す事は極めて大事な事であるが既に幾星想を経た今日資料は散逸し伝承はうすれこれを系統的にまとめる事は大へんな事でありながら古老有志諸兄が数年前から相語らい、足を運び旧跡をたずね、図書館の本をひもときここに本町郷土誌の完成をみた事は等しく喜を共にすると共に明治百年記念行事の一環としても新鹿児島空港開港記念誌としても将来本町発展のため貴重な資料として高く評価し末永く保存愛読される事を希念して止まない。吾が郷土は古代三山陵の一つ、高屋山上陵の御在所である。霧峯高千穂を中心とする霧島の連山、雄峯桜島のふところにいだかれた豊かな吾が郷土が今後雄大な大自然によく調和した新しい町づくりが前世の温い肌の香りと共に後世に正しく伝えられ、つくられ悠久にたくましく前進する溝辺のすがたを想像し乍ら編集委員の各位に深く感謝し発刊の辞としたい。

昭和四十八年十一月三日

溝辺町長 有馬四郎

よ ろ こ び

溝辺町郷土誌編集は五里霧中の困難を極めた。史蹟が点在していたがそれについての記録は絶無であり、過去においてこれらを研究記録した人物もいなかつたり、どれが先でどれが後なのか、どこから手をつけてよいのか糸口を探りあることすらできない有様であった。いくたびか計画し模索し停滞し計画を変更し発刊が延引されることになったのである。その間町の中心に国際空港がオープンし、更に高速自動車道がとりつけられようとしている。溝辺町は大きく変容しようとしている。ここに溝辺町民はあゆみ来つた過去を振り返り、将来を展望し、急激な変容の中に適確な指針を把握しあすの町勢発展をはからねばなるまい。溝辺町に於ける郷土誌編集の要請は単に最近における郷土誌ブームによるものではなく、町各般に亘る変容にそなえて過去を反省し、将来を展望し適確な指標を得るためのものであろう。したがつて溝辺町郷土誌の力点は明治百年史であり、実質的にはその間ににおける溝辺高原開拓百年史である。汗のにじむ溝辺農業開発百年史が溝辺町郷土誌の中味なのである。だから溝辺町郷土誌は発刊されてもきょう底で書魚らすみかとするものではなく常に座右に於いて溝辺町民に親しまれるべきものである。溝辺町郷土誌は溝辺町が食糧供給地であることに変わりのないことを指示してくれているであろう。

この郷土誌は町外の専門家に依頼したものではなく、全く素人である町民だけで町内くまなく足でかせいで書きあげたものである。だから過去の豊富な記録等による隣接町の郷土史との記載事項が時たまつながらないところがあるかもしだれない。だがこのことにはこと更にこだわる必要はないと考える。要はこの郷土誌によって町民が自分達の姿を容観し将来への指針を合意的に見出し更に躍進の方途を創造することである。ながい間郷土誌編集にとりくまれついにこれを完うされた多くの方々に敬意を表し喜びのことばといたします。

昭和四十八年十一月三日

溝辺町教育長 佐 方

直

編集を終わつて

「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず、よどみにうかぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しうとどまることなし。世の中にある人と住み家とまたかくの如し。」といえる方丈記の著者は、始め無く終り無き永劫の時の流れのまにまに、変転窮り無き世の姿を、うがち得てまことに妙といわればならぬ。

遠い神代の昔、この地に君臨しました、天津高彦火々出見尊が、かむさりまして、神割の丘にかくしまつという太古の語り伝えはさておき、じ來幾星霜、われらの祖先が、父孫相繼いで、守り育てた我が郷の世々の移り変わりも、今更にこれをつまびらかに知るすべは無く、長き封建社会の幕閉じて明治開国を迎えたわずか一〇〇年の歩みも今にしてこれを記録にとどめることができが、やがて、夢の彼方に消え去るであろう。

「歴史は創造される。人々の知恵と努力の積み重ねによって」。しかも温故知新の言葉の示すように、すべては、過去の経験の上に立って新しい文化の創造が可能であるとするならば、先人の足跡を探り、現代の姿を正しく後の世に伝えることは、現代に生きるわれわれが、子孫に対する大事なつとめではなかろうか。こうした見地に立つて溝辺町が郷土誌編集のことを企画してから、早くも五年の歳月が流れた。

思えば、るべき文献もほとんど無く、あまつさえ、浅学非才、出来上ったものは極めて不備、誤びゆう脱漏も亦多かろうが、これらは後人の批正にゆだねることとし、ささやかな冊子ではあるが、今日ここに発刊の運びに到つたことは、まことに喜びに堪えない。

日月流水、昭和四十三年七月一日スタート以来、五ヶ年の歳月は瞬く間に過ぎ去ったように感ぜられるのも、この間、同人諸君が資料蒐集に、編集事務に積み重ねられた御労苦、更には、懇切に指導助言を賜わった幾多先輩の方々に対し、ここに改めて深甚の謝意を表するとともに、本誌が後につづく人々のための郷土理解に少しでも役立ち、ひいては、郷土発展の一助ともなるならばこの上無き幸である。

昭和四十八年十一月三日

溝辺町郷土誌編集委員長

松

山

績

目 次

第一部 地誌編

第一章 位置・面積	三
第一節 位 置	三
第二節 面 積	三
第二章 地形・地質	四
第一節 地 形	四
第二節 地 質	八
第三節 土 質	一〇
第三章 気候・動植物	一一
第一節 気 候	一一
第二節 動 植 物	一二
第四章 人口・地名	一三
第一節 人 口	一三
第二節 地 名	一九
第三節 部落別世帯数と人口	二五
第二部 歴史編(原始・近世)	二六
第一節 先土器(旧石器)時代	二六
第二節 神話と溝辺	三一
第一章 原 始	三三

第二節 縄文文化時代 一四

第三節 弥生文化時代 一五

第二章 古 代 一五

第一節 小国の出現と統一事業 一五

第二節 大和朝廷の成立と發展 一五

第三節 熊襲と隼人 一五

第四節 国造県主と大隅國の豪族 一五

第五節 古墳について 一五

第六節 上人ヶ岡の石祠と仏像 一五

第三章 中 世 一六

第一節 島津氏の入国 一六

第二節 建久図田帳 一六

第三節 溝辺城と溝辺孫太郎 一六

第四節 溝辺郷内の諸城址 一六

第五節 南北朝動乱と溝辺 一六

第六節 肝付兼固時代 一七

第七節 戦国安土桃山時代の溝辺周辺の状況 一七

第八節 薩藩に剛勇をならした 一七

長野助七郎 一七

第九節 秀吉の文禄検地と領主肝付兼三の所領替え 一八

第四章 近世

第三節 農地改革

三六

第一節 藩政時代と島津氏

八

第四節 林業

三四

第二節 外城制度

八

第五節 商工業

三四

第三節 門割制度

八

第六節 身分制度

三四

第四節 一向宗の禁制

九

第七節 通信機関の発達

三四

第五節 加治木島津家の誕生と溝辺

一〇

第六節 段溝灌漑水路の設置

三四

第七節 溜池治水工事(剝岩池)

一一

第八節 藩政時代の陸上交通路

三四

第九節 薩英戦争

一二

第十節 治水・治山

三四

第三部 歴史編(明治以降)

第一章 政治・財政

第六章 教育・文化

三七

第一節 明治初期の溝辺

一二

第二節 村制実施後の溝辺

三四

第三節 現在の溝辺

二九

第四節 各大字の任意自治団体

二九

第五節 明治百年郷土開発の先達

四四

第六節 生活文化

二九

第七章 宗教

三四

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第二章 産業・経済

三四

第一節 農業

一四

第二節 農業諸団体

一四

第一節 農業

二七

第二節 兵事

二七

第八章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第九章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十一章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十二章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十三章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十四章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十五章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十六章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十七章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十八章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第十九章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十一章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十二章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十三章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十四章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十五章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十六章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十七章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十八章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第二十九章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第三十章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第三十一章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第三十二章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第三十三章 兵事

二七

第一節 神仏分離と廢仏毀釈

三四

第二節 宗教に関する実態

三四

第三節 農業

一四

第四節 兵事

二七

第一節 西南の役.....
第二節 日清戦争.....
第三節 日露戦争.....
第四節 日支（日華）事変と

大東亜戦争.....
第五節 十三塚原軍用飛行場.....
第六節 看

日支（日華）事変と
大東亜戦争.....
第五節 十三塚原軍用飛行場.....
第六節 看

第四部 遺産編

第一章 名勝・遺跡.....
第一節 高屋山陵.....
第二節 神社.....
第三節 仏閣.....
第四節 遺跡.....
第五節 看

高屋山陵.....
神社.....
仏閣.....
遺跡.....
第五節 看

第二章 風俗

第一節 民芸.....
第二節 民謡.....
第三節 倜げん.....
第四節 迷信.....
第五節 年中行事と庶民生活.....
第六節 結婚式の今昔.....
第七節 看

民芸.....
民謡.....
倜げん.....
迷信.....
年中行事と庶民生活.....
結婚式の今昔.....
第七節 看

第五部 新らしい 溝辺の夜明け（結び）

第一章 新鹿児島空港の誕生.....
第一節 新鹿児島空港の設置.....
第二節 新鹿児島空港建設の経緯.....
第三節 新鹿児島空港施設の概要.....
第二章 コミュニセンターの設立
新生溝辺の胎動.....
● 年表.....
編集後記.....
第五節 看

新鹿児島空港の設置.....
新鹿児島空港建設の経緯.....
新鹿児島空港施設の概要.....
新生溝辺の胎動.....
● 年表.....
編集後記.....
第五節 看